様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ１６８００

研究課題名（和文）抽象名詞の可算性とその習得の難しさ：日本人英語学習者への実証研究

研究課題名（英文）The countability of abstract nouns and its acquisition difficulties: Research with Japanese learners of English

研究代表者
小川　睦美（OGAWA, Mutsumi）

日本大学・商学部・講師

研究者番号：４０７３３７９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：日本人英語学習者による可算性判断は、具象・抽象の区別と強い相関関係にあった。しかし、習熟度の高い学習者は抽象名詞でも可算と捉えることができるようになることがわかった。L2での可算性判断において、有界性などの意味カテゴリーに共通するような性質や派生タイプの影響はあまり見られず、L1における名詞の解釈から影響を受ける可能性が強いかもしれないと示唆された。またL2学習者の中には、文脈情報に頼らず直感で可算性を判断する者もいるが、その数は決して多くなく、必ずしも習熟度の低い学習者のみに見られる傾向ではないことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多くの先行研究で習得が困難と指摘されてきた抽象名詞の可算性において、本研究で実証研究データを提示できたことは、今後の英語教育に大きく役立つと思われる。特に、L2の可算性判断は語彙意味の影響を受けるのではなく、L1の解釈に起因する可能性が強いと示唆された。これは、可算性の指導時に使用される「抽象・具象」といった用語の理解や「数える」という行為自体が、結局はL1での解釈を通して行われている可能性を示している。文法としての可算性の本質的な役割や、文脈情報による抽象名詞の可算化について、文法書や指導に活用できる説明を再検討する必要がある。

研究成果の概要（英文）：The countability judgment by Japanese learners of English is strongly correlated to the distinction between concrete and abstract nouns. As learners improve in English, they will learn to judge abstract nouns as count. Furthermore, properties that are common among semantic categories such as boundedness and derivation types are unlikely to influence L2 countability judgment of abstract nouns. Rather, L1 interpretation of nouns may have stronger effects after all. The study also found that some learners rely on intuition to decide noun countability without drawing on contextual information; however, such learners are neither the majority nor those with low proficiency.

研究分野：第二言語習得論

キーワード：抽象名詞　可算性　有界性　境界　冠詞　英語　日本語

１．研究開始当初の背景

本研究は、日本語を第一言語(L1)、英語を第二言語(L2)とする学習者による英語名詞の可算性の習得について、抽象名詞に焦点を絞り、その難しさの原因を明らかにすることを目的とする。英語冠詞の使用には、文脈定性の理解と可算性の判断が伴う。今まで多くの先行研究が、文脈に焦点を当てて学習者の習得実態を調査してきた(Huebner, 1985; Ionin, Ko, & Wexler, 2004)。日本人英語学習者を対象にした研究の中で、習熟度が上がるにつれて文脈定性は正しく区別されるようになるが、可算性の判断には難しさが残るケースが多いことが指摘されている(Ogawa, 2014; Akamatsu, 2018)。特に抽象名詞の可算性判断が難しいことは、先行研究でも指摘されてきたが、その使用や習得を体系的に記述した研究はなく、具体的な要因は明らかになっていない(Hiki, 1990; Lee Amuzie & Spinner, 2012; Ogawa, 2008; White, 2009)。

英語の文法書には「抽象名詞は不可算だが、抽象的な概念ではなく具体的な事例や種類を示す場合は可算として扱われる」と説明がある(Ando, 2005; Yasui, 1996)。もし学習者が「具体性」ではなく「数える」ことの可否で抽象名詞の可算性を判断しているのであれば、L1 日本語の類別詞(個・回など)を基準にしている可能性がある。日本語では１つの名詞が複数の類別詞と共起できる(例：一本／一束／一箱のそうめん)。これは、日本語の名詞が概念・カテゴリーのみを表し、類別詞の機能によって名詞の具体的な構成素が指示可能な部分として取り立てられているからである(Imazato, 2004)。「概念から具体的な構成素を指して取り立てる」という認知操作は英語抽象名詞の可算化と類似しており、この認知が L2 において同様に使えるのであれば、日本人英語学習者にとって抽象名詞の可算化自体は難しいことではないように思われる。

名詞の個別度は境界の概念に関連している。有界であれば可算、非有界であれば不可算とされ、有界性は名詞の語彙的意味にも関連している。英語抽象名詞は派生・語彙意味と有界性の関係により、表１のように細分類できる(Brinton, 1998; Paradis, 2001)。L1・L2 レキシコンの研究において、可算・不可算の区別が名詞の語彙情報として記憶されていることが指摘されており、L2 での抽象名詞を調査した研究でも、学習者が語彙意味によって可算性を判断している可能性を示唆している(Hiki, 1990; Ogawa, 2014)。これらのことから、語彙意味に基づく有界性と学習者による可算・不可算の区別には相関が見られる可能性が考えられる。

表１　抽象名詞の派生と有界性の関係

<table>
<tr><td rowspan="7">抽象名詞</td><td rowspan="3">動詞派生</td><td colspan="2">状態</td><td>非有界</td><td>know → knowledge</td></tr>
<tr><td colspan="2">行為</td><td>非有界</td><td>guide → guidance</td></tr>
<tr><td colspan="2">達成・到達</td><td>有界</td><td>arrive → arrival</td></tr>
<tr><td rowspan="4">形容詞派生</td><td rowspan="3">段階的</td><td rowspan="2">反意的(尺度有)</td><td>非有界</td><td>safe → safety</td></tr>
<tr><td>有界</td><td>excellent → excellence</td></tr>
<tr><td>相補的(尺度無)</td><td>有界</td><td>true → truth</td></tr>
<tr><td colspan="2">非段階的 ※名詞派生のため調査からは除外</td><td>―</td><td>medical ← medicine</td></tr>
</table>

学習者にとって最も難しいのは、何をもって抽象名詞の意味に具体性がある、すなわち可算化できると判断すればいいのかという点である。日本語では、概念の具体性を示すために名詞に形態素(類別詞、修飾語など)を補う(Kageyama, 1999)。対照的に、英語では文脈による多義性や、文脈内での名詞の解釈によって抽象名詞の可算性が決定されるため、語彙意味特性より文脈の影響が強いと指摘されている(Grimm, 2014)。日本人英語学習者にとって抽象名詞の可算性判断が困難なのは、表面的な言語表記に頼らず、文脈情報だけで可算性を判断しなければならないからかもしれない。

２．研究の目的

本研究は、L2 学習者による英語抽象名詞の可算性の習得について、日英語の相違点を考察し、単語レベル、文脈レベルでの分析を行うことにより、学習者の習得実態を明らかにし、難しさの原因を解明することを目的とする。具体的には、以下の３つの観点から調査する。

2.1 L1 転移の可能性

L1 日本語からの転移の可能性を探るため、まずは日本語の調査をする。日本語では、数える際に類別詞を使い、最も一般的な類別詞が「個」と「つ」である。その使用条件は名詞句が指すものや概念が個別的に認知しやすいかという度合いで定義される。「個」は個別化の度合いが高いものが対象となり、「つ」は個別化が可能であれば使用できるため、「つ」の使用範囲は「個」より広い(眞野, 2004)。また個別化の度合いは、固体メタファー(例：固まる、壊す)、気体・液体メタファー(例：膨らむ、あふれる)のどちらと共起できるかにも反映される。さらに、同質のものとして数えることが可能か、異なる種類としてしか数えることができないのか、という異質性によって個別化の度合いを比較することもできる(例：同じ２つの意見、異なる２つの意見；*同じ２つの時代、異なる２つの時代)。したがって、類別詞「個」「つ」と抽象名詞の共起容認度、メタファーと異質性による抽象名詞の個別化の度合いを調べ、語彙意味における有界性と個別化の度合いに関連があるのかを調査する。以下の仮説を検証する。

(1) 抽象名詞の個別化が可能であれば、「つ」との共起が容認される。
(2) 有界とされる名詞は個別化の度合いが高いため、「個」の容認度が高い。さらに、固体メタファーの使用率も高く、同質・異質の両方による数え方が容認される。
(3) 非有界とされる名詞は個別化の度合いが低く、「個」の容認度が低い。さらに、固体メタファーの使用率が低く、気体・液体メタファーは容認される。異質による数え方のみが容認、もしくは異質による数え方さえ容認されない。

2.2 単語レベルの影響

語彙意味に基づく有界性が、L2 学習者による抽象名詞の可算性判断に影響を及ぼしているのかを単語レベルで検証する。文法書等では、名詞の可算性の説明の中で具象名詞・抽象名詞という用語が使われており、「抽象名詞は不可算である」のように記述されることが多い。抽象・具象の区別は言語外の認知能力であり、そもそも学習者はどの程度その区別ができるのか、また L1 での抽象・具象の区別が L2 での区別とどの程度の相関関係にあるのかを調べる必要がある。また、モノと記号を結びつける言語の本質的機能を理解し、文法という抽象的なルールを理解するメタ言語能力と、抽象・具象の区別を理解できる認知能力に関連があるとすれば、英語習熟度の高い学習者ほど、抽象・具象の区別にも敏感であると予想される。その他に、L2 学習者の傾向として、名詞の可算性を不変的な性質と見なすことがあり、直感的に判断した可算性をどのような文脈にでも適用することが指摘されている(Butler, 2004; Yoon, 1993)。学習者が直感的に名詞の可算性を判断しているとすれば、その判断は語彙意味の有界性と関連している可能性がある。本研究では、具体的には以下のことを調査する。

(4) 学習者は抽象・具象の区別ができるのか。その認知判断は英語習熟度と関連するのか。
(5) 抽象・具象の判断と、可算・不可算の判断は、どの程度の相関関係にあるのか。
(6) L2 での直感的な可算性の判断は、名詞の抽象・具象の判断と関連しているのか。もしくは、語彙意味の有界性と関連しているのか。

2.3 文脈レベルの影響

L2 学習者の可算性判断と、抽象名詞の語彙意味に基づく有界性の関係を文脈レベルで検証する。L1 英語話者の研究では、状態・動作・達成といった語彙的アスペクトが名詞の可算性と関連していることが報告されている(Barner et al., 2008)。しかし、L2 の研究ではそのような関連性は見つかっておらず、名詞の派生(転換・接尾辞)、もしくは L1 における複数形態素の影響が抽象名詞の可算化の要因である可能性が指摘されている(Lee Amuzie & Spinner, 2013)。また Butler(2002)が言うように、L2 学習者が直感により可算性を判断しているのであれば、名詞のみを見て判断した可算性と、文脈内で判断した名詞の可算性は一致すると予想される。本研究では、具体的に以下のことを調査する。

(7) 文脈内の学習者の可算性判断は、語彙意味に基づく有界性の影響を受けるのか。それとも、名詞の派生タイプの影響を受けるのか。
(8) 学習者は文脈情報に頼らず、名詞に対する直観的な判断に基づき可算性を決定するのか。

３．研究の方法

3.1 L1 転移の可能性

類別詞「個」「つ」と抽象名詞の共起容認度を調べるため、表 2 の調査を行った。各調査において、参加者は「3 個の～」「3 つの～」という名詞句を見て、その数え方が自然かどうかを 7 段階で判断した(かなり不自然・不自然・やや不自然・わからない・やや自然・自然・かなり自然)。また、「個」「つ」以外に、どのような類別詞と共起できるかも自由記述欄を設けた。

表 2　類別詞の共起容認度テストで使用した名詞の種類および参加者人数

	抽象名詞の種類	有界性による分類	実験参加者人数
調査１	動詞派生(N=30)	状態(n=10) 動作(n=10) 達成(n=10)	日本人大学生 124 名
調査２	形容詞・形容動詞派生(N=21)	尺度有非有界(n=7) 尺度有極限的有界(n=7) 相補的有界(n=7)	日本人大学生 132 名
	名詞用法のみ(N=72)	出来事(n=24) 抽象関係(n=24) 抽象物(n=24)	

次に、抽象名詞と固体・気体・液体メタファーの使用について調査を行った。表 2 の抽象名詞のうち、動詞派生の 3 つのカテゴリーから、それぞれ 5 個ずつ名詞を選定した(N=15)。日本人大学生 83 名が参加した。参加者にはメタファーとなる動詞のリストが提示され、それぞれ名詞に合う動詞を選択した。その際、助詞は何を使用してもよいこと、動詞の自他交替(例：固まる・固める、曲がる・曲げる)をしてもよいこと、リスト以外の動詞で適切なものがあれば記入することが指示された。

最後に、異質性による個別度合いの調査を行った。メタファーの調査と同様の名詞を使用し、日本人大学生 39 名が参加した。名詞は、「同じ 2 つの～」「異なる 2 つの～」の形式で提示され、動詞を伴い文の形で提示された(例：同じ 2 つの感謝を伝える、異なる 2 つの感謝を伝える)。参加者はそれらの文を読み、表現が自然かどうかを 7 段階で判断した。

3.2 単語レベルの影響

参加者は表 3 の通りである。L1 日本語、L2 英語における抽象・具象の判断課題を実施した。名詞は、表 4 に示した意味カテゴリーから各 5 個、計 60 個を選定した。選定した名詞の日本語訳・英語訳に関して、別の学習者群により合致することを事前に確認した。判断課題では始めに、実体の有無に基づく具象名詞と抽象名詞の定義を説明した上で、ランダムに並べた名詞を見て、抽象・具象のどちらかを判断した。

表 3　各判断課題の参加者人数と英語習熟度(平均 TOEIC スコア)

課題	言語	入門レベル	初級レベル	中級レベル
抽象性判断	L1 日本語	34 名 (234)	30 名 (377)	44 名 (495)
	L2 英語	27 名 (235)	29 名 (382)	43 名 (497)
可算性判断	L2 英語	60 名 (221)	59 名 (340)	41 名 (550)

表 4　抽象・具象名詞の意味カテゴリー

抽象名詞 (N=30)	抽象物	出来事	抽象関係	状態	動作	達成
具象名詞 (N=30)	人間	動植物	人工物	自然物	場所	場所･機関

L2 英語における可算性判断課題では、抽象性判断課題と同様の名詞 60 個を使用した。始めに、複数形-s をとれるかどうかに基づく可算名詞・不可算名詞の定義を説明した上で、リスト内の名詞が可算・不可算のどちらかを直感的に判断した。

3.3 文脈レベルの影響

参加者は、中下級レベル 21 名、中上級および上級レベル 25 名の計 46 名である。文脈内での可算性判断課題で使用された名詞は、表 5 の通り計 24 個である。課題では、始めに日本語で文脈設定が提示され、それに続く英文を読み、名詞に対して正しいと思われる冠詞を、不定冠詞 a/an、ゼロ冠詞 ø のいずれから選択した。文脈はすべて可算の解釈(a/an が正答)を引き出すように設定され、フィラーとしてそれ以外の冠詞(the, ø)が正答となるものを 13 問用意した。

文脈内での可算性判断課題の後、直感的可算性判断課題を実施した。使用した名詞は、表 5 の名詞を含む抽象名詞 30 個、具象名詞 30 個の計 60 個で、形式は 3.2 の調査と同様である。

表 5　文脈内での可算性判断課題で使用した名詞

	状態	動作	達成
転換	fear, hope, respect, worry	drive, fight, search, move	promise, start, stop, win
接尾辞	confusion, imagination, intention, satisfaction	calculation, competition, discussion, observation	registration, decision, application, recognition

４．研究成果

4.1 L1 転移の可能性

類別詞との共起容認度は 7 段階で測られ、かなり不自然を-3、かなり自然を 3 として数値化した。表 6 は各カテゴリーの平均容認度を示している。すべての抽象名詞において、「個」の容認度はマイナスとなっており、抽象名詞は「個」で数えることのできるほど個別度合いが高くないことがわかった。その一方で、「つ」の容認度は「個」より高く、プラスの値を示していることから、抽象名詞も個別化は可能であることがわかった。

表 6　類別詞と抽象名詞の共起容認度

	動詞派生			形容詞・形容動詞派生			名詞用法のみ		
	状態	動作	達成	尺度有	尺度有 極限的	相補的	抽象 関係	出来事	抽象物
	非有界	非有界	有界	非有界	有界	有界	非有界	(非)有界	有界
個	-0.98	-1.04	-0.57	-1.38	-1.38	-1.52	-0.36	-0.68	-0.51
つ	1.33	0.61	1.24	1.01	0.54	0.15	1.96	1.79	2.00

次に、類別詞ごとに有界性の観点から結果を比較すると、「個」において、達成は状態・動作より共起容認度が有意に高いが、「つ」を見てみると、状態は達成と同レベルで容認される結果となった。形容詞派生の抽象名詞では、有界性による違いは「個」では見られず、「つ」においては、非有界とされる段階的尺度を持つ名詞(例：美しさ)の方が、有界とされる極限的・相補

的意味を持つ名詞(例：真っ直ぐさ、正しさ)より容認度が高いという結果となった。名詞用法のみの抽象名詞を見ると、両類別詞において、抽象物と抽象関係が出来事より容認度が高いという結果になった。これら 3 種類の抽象名詞の語彙意味的有界性と類別詞の容認度の結果から考察すると、数えやすいかどうかと有界性が関連しているとは言い切れない結果となった。

「個」「つ」以外の類別詞の使用については自由回答であったが、主に 3 タイプに分けられ、回数、種類、そして動作主・経験主を指す類別詞が多く回答された(表 7)。動作・達成は圧倒的に回数の類別詞と共起し、開始・終結・変化といったアスペクトが時間的局面での個別化を好むことがわかった。逆に、時間的区切りを持たない状態動詞はその解釈を好まず、経験主である「人」によって個別化をする解釈が多かった。

表 7　その他の類別詞の使用割合(回答数)

	「回」「度」	「通り」「種類」	「人」
状態	37.8%（42）	10.8%（12）	51.4%（57）
動作	75.2%（185）	11.4%（28）	13.4%（33）
達成	78.7%（163）	1.4%（3）	19.8%（41）

メタファーの使用調査の結果は表 8 の通りである。固体メタファーを使用できる点において、語彙意味の有界性に違いは見られなかった。しかし、気体・液体メタファーに関して、状態の方が達成・動作より有意に使用されやすかった。非有界である状態に気体・液体メタファーが使用されやすく、有界である達成に使用されにくいのは、有界性が影響している可能性がある。

表 8　メタファーの使用割合(回答数)

	固体メタファー	気体・液体メタファー	その他
状態	40%（159）	45.6%（181）	14.4%（57）
動作	43.4%（119）	17.5%（48）	39.1%（107）
達成	48%（109）	8.4%（19）	43.6%（99）

異質性による個別度合いの調査結果は、類別詞の共起容認度と同様に 7 段階で測られた(表 9)。すべてのタイプにおいて、同質より異質として捉える方の容認度が高く、どの抽象名詞も同質として捉えるのは不自然である傾向があった。有界性で比較すると、同質・異質の両解釈において、状態の方が動作・達成より容認度が高かった。「つ」と共起できる度合いにおいて、状態と達成には有意な差はなかったが、「同じ・異なる」という修飾句がつくことによって、達成が個別化しにくくなったと考えられる。その原因として、名詞の構成要素を質に限定したことが挙げられる。状態は、異なる質のものを想定しやすく(例：感謝、尊敬)、達成は想定しにくいのかもしれない(例：決定、到着)。また、その他の類別詞の結果からわかるように、達成は回数を表す類別詞との共起率が高く、「つ」で数える際も回数を含意していた可能性があり、個別化する基準を質に限定することにより、容認度が下がってしまったと考えられる。

表 9　同質・異質による個別化の容認度

	同じ 2 つの～	異なる 2 つの～
状態	-0.73	1.16
動作	-1.36	0.81
達成	-1.23	0.86

4.2 単語レベルの影響

L1 日本語、L2 英語における抽象性判断では、具象名詞は具象と判断され(L1: 91.8%, L2: 92.9%)、抽象名詞は抽象と判断される傾向が強かった(L1: 93.6%, L2: 92.8%)。L1・L2 で抽象性判断に大きな差がないことがわかったが、語彙によっては差が見られたものがあった。その原因の 1 つは、名詞が指す意味が言語間で異なるからだと考えられる(例：city は「都市」だけでなく「町・街・市」; art は「芸術」だけでなく「絵・絵画」)。また、英語習熟度が低い者ほど、英単語と意味の結びつきが弱く、抽象性判断にぶれが生じており、それが L1 と L2 での判断の違いとして表れたと考えられる。

L2 英語における可算性判断と抽象性判断には強い相関関係があった(図 1)。つまり、抽象名詞は不可算、具象名詞は可算と判断される傾向があった。しかし、名詞によっては英語習熟度によってその傾向が変化し、抽象と捉えても可算とし、具象と捉えても不可算と判断できるようになることがわかった。

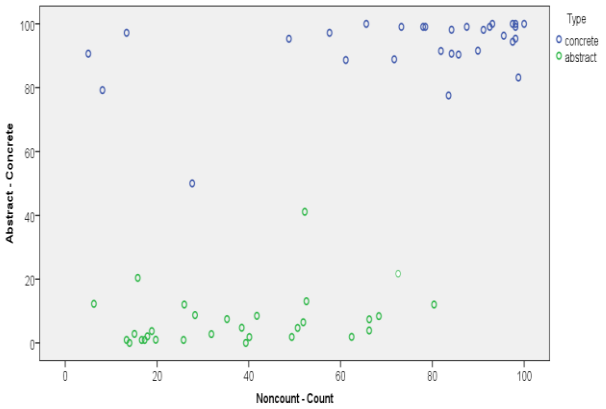

図 1　可算性判断と抽象性判断の分布

L2 英語での可算性判断と意味カテゴリーの関係について、具象名詞はどのカテゴリーも可算と判断されやすかった。抽象名詞では、状態を表す名詞(worry, hope, respect, trust)が不可算と判断されやすい傾向があったが、その他のカテゴリーでは特にそのような相関は見られなかった。つまり、抽象名詞が直感的に可算か、不可算か判断される場合、その判断はカテゴリーに共通するような性質によるものではない可能性が示唆された。

4.3 文脈レベルの影響

文脈内での可算性判断課題の結果は表 10 の通りである。名詞タイプ、派生タイプ、習熟度の交互作用が見られたが、状態・動作よりも達成の方が可算として解釈されやすいという結果は得られなかった。また、派生タイプの強い影響も見られなかった。つまり、接尾辞は品詞を名詞に限定するため名詞として解釈されやすく、不定冠詞を付与しやすいが、転換の場合は 2 つの品詞(動詞・名詞)を 1 つの形式で表すため、不定冠詞を付与しづらくなるという派生タイプの有意な影響はなかった。しかし習熟度別に見ると、特に習熟度の低い学習者は派生タイプに頼る可能性があること、状態を可算として解釈することが難しい傾向にあることが示唆された。

表 10　文脈内での可算性判断の平均正答数(4 点満点)

	中下級			中上級および上級		
	状態	動作	達成	状態	動作	達成
転換	1.4	2.1	1.9	2.3	3.0	2.3
接尾辞	1.6	2.7	2.3	2.1	2.6	3.1

文脈内での可算性判断が、名詞のみを見た時の直感的可算性判断とどの程度一致するのかを調査した結果、調査対象名詞計 24 個のうち、20・22・24 個が一致するというかなり強い一致を示した学習者が 3 名、16～18 個が一致するという強い一致を見せた学習者が 14 名、それ以外の 29 名には有意な一致は見られなかった。直感的可算性判断に頼っていると思われる 17 名のうち、習熟度の低いものは 5 名で、直感に頼るかどうかは必ずしも習熟度に関係しないことがわかった。また、直感的可算性判断と名詞タイプ・派生タイプの関連性は見られず、何が可算として捉えられやすいかは、有界性や接尾辞の有無に関係ないことがわかり、L1 における名詞の解釈が影響している可能性が指摘された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

① Ogawa, M. (to appear). The count-mass distinction and English articles. *Second Language*, *18*.

〔学会発表〕(計 8 件)

① Ogawa, M. (2018). *Boundedness based on lexical aspect and L2 countability judgment of English abstract nouns*. Poster presented at the 28th Conference of the European Second Language Association (EUROSLA).

② Ogawa, M. (2018). *Intuitive countability judgment and article choice: Do L2 learners rely on intuition to determine noun countability in context?* Paper presented at the 48th Annual Conference of the Chubu English Language Education Society (CELES).

③ Ogawa, M. (2018). *Searching for a determining factor in L2 countability judgment on English abstract nouns*. Paper presented at the American Association for Applied Linguistics 2018 (AAAL).

④ Ogawa, M. (2017). *Perceived countability of concrete and abstract nouns in L2 English*. Paper presented at the 43th Annual Conference of the Japan Society of English Language Education (JASELE).

⑤ Ogawa, M. (2017). *Metalinguistic awareness of concrete and abstract nouns in L1 Japanese and L2 English*. Paper presented at the 47th Annual Conference of the Chubu English Language Education Society (CELES).

⑥ Ogawa, M. (2016). *A countability hierarchy based on boundedness: An observation of Japanese abstract nouns and count classifiers ko and tu*. Paper presented at the 6th UK Cognitive Linguistics Conference.

⑦ 小川睦美 (2016). 「日本語における抽象名詞の個別化と有界性の考察」 中央大学人文科学研究所「言語の理解と産出」チーム 2016 年度第 2 回公開研究会 (講演)

⑧ 小川睦美 (2015). 「「個・つ」の容認度に見られる抽象名詞の個別化と有界性の関係」 日本中部言語学会第 61 回定例研究会

６．研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。